

「郭象莊子序」の眞偽について

水 野 厚 志

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第1号 抜刷
2016年（平成28年）3月20日

「郭象莊子序」の眞偽について

水 野 厚 志

The Issue of Truth or Falsehood of Guoxiang's Introduction of Zhuangzi

MIZUNO, Atsushi

Abstract

In Fen Youlan's words the emphasis on the word "Emperor" in the phrase "Saint and Emperor" in the Introduction of Zhuangzi is inappropriate for Zhuangzi's Annotation. He says that it is Zhuangzi's Annotation that emphasizes the nature of all things in the universe, and the introduction is for Zhuangzi instead of Zhuangzi's Annotation, which in a sense is to the point when it is prescribed to the first half of Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi. In the latter half of Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi, words like "*duhua*" and "*zide*" which are preferred by Guo Xiang and express his original thought appear many times. This paper argues that it is appropriate to regard the text after the expression "故曰不知義之所適 (*gu yue bu yi zhi suo shi*)," which is in the latter half of Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi where Guo Xiang's original thought can be observed, as a later added portion to the annotation "Saint and Emperor" of the first half.

Keywords: 莊子 (Zhuangzi), 郭象 (Guo Xiang), 郭象莊子序 (Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi)

目 次

はじめに

- 一. 『莊子』「郭象莊子序」の眞偽を巡る問題について
 - 二. 『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」
 - 三. 『莊子』「郭象莊子序」と郭象「莊子注」の関係について
- まとめ

はじめに

周知のごとく、現行本『莊子』三十三篇本は現存する唯一の『莊子』の完本である。そしてその編纂を手掛けたのは、西晋の郭象である。

嘗て武内義雄は、日本の高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾の文に、陸徳明の『經典釋文』序録と共通する部分が多く見られ、郭子玄（郭象の字）の語としてしているところから、高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾全體が郭象の跋文であるとし、¹⁾ この説は今日に至るまで廣く支持されている。

それに対して、もともと現行本に付されている「郭象莊子序」について疑いの目を向けた學者は、管見する限りにおいて、日本國內では青木五郎と古勝隆一だけであるが、²⁾ 中國・臺灣では「郭象莊子序」の眞偽を巡って、王利器・余敦康らを皮切りに、今日に至るまでその問題を巡る議論は引き續いている。³⁾

また、郭象の跋文であったとみられる高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾の文は、現行本『莊子』三十三篇本の最後の篇である「天下篇」の後に付されていたのであるが、「天下篇」の内容を精査するとその中心となっている思想の一つに内聖外王が擧げられ、⁴⁾ 奇しくもその内聖外王は現行本『莊子』巻頭の「郭象莊子序」にも置かれている。

『莊子』本文・「郭象莊子注」・「郭象莊子序」全體の中で、内聖外王が用いられているのはこの二カ所だけであることを考えると、兩者の間には何らかの繋がりがあると考えるのが自然である。

そこで本稿では、「郭象莊子序」の内容を見直すことによって、現行本『莊子』郭象序の眞偽に對する私見を述べていくことにしたい。

一. 『莊子』「郭象莊子序」の眞偽を巡る問題について

「郭象莊子序」の眞偽問題を提起した嚆矢は王利器であり、『宋會要輯稿』所載の文に、北宋初年に莊子序の眞偽を巡って、それを残すか廢すか議論された記録があることから、偽作ではないかと疑っている。そしてそのすぐ翌年に余敦康は、王利器の論據としているのが『宋會要輯稿』だけであり、莊子注と莊子序の内容に齟齬はきたしていないとして、反駁している。また、王利器は何焯（1661-1722）の『何義門家書』卷二書中に、宋版『莊子』の序文を刻したのは、王安石の子の王雱（1043-1076）が當時まだ無名であったため、郭象に假託して莊子序を偽作したと記しているのに對し、景德三年に刻印された時には王安石の生まれた北宋の眞宗天禧五年（1021）まで十三年、王安石の子の王雱が生まれた慶曆三年（1043）までは更に三十七年も距てていることから、別人であるとしている。そして『新唐書』「藝文志」丙部に王滂の『百里昌言』二卷があり、陳隋の間の人であるとされているのがまさしく其の人であるとしている。⁵⁾

また、馮友蘭は「郭象莊子序」で「内聖外王」の王が強調されているのは、「莊子注」にはそぐわない。萬物の性分を強調するのが「莊子注」の立場だとし、「莊子注」の序文ではなく、『莊子』に對する序文であるとしている。⁶⁾

近時、その他の學者では、姜龍翔が莊子序の最後の語句と『世說新語』の引く『竹林七賢論』の向秀を評した文の語句との異同を確認した結果、載達の文を脱胎したものであり、東晋晩期の作品であって、この「莊子注」は郭象の作品ではない、と一應の結論を導き出している。⁷⁾ しながら『竹林七賢論』は佚文であり、向秀等の注文が紛れ込んでいないとも限らず、まだこれからも様々な意見が噴出してきくものと思われる。

一方日本での「郭象莊子序」の眞偽を巡る問題については、青木五郎は「余敦康の反論は、王利器の論に対する批判に性急なあまり偽作という行爲が原意を改纂しようとする目的の外に、原意に即しながらも亡佚・散亂したものを新たに作成して原著者の名を冠することによって、それを権威あらしめると同時に、自己の（思想的）立場を有利ならしめるために行われた、という中國思想史に特に顕著な状況に対する配慮を欠いている」⁸⁾と述べている。加えて青木五郎は、「端的にいえば、郭象の思想に習熟したものであれば、この位の序文（あくまで余敦康の論證の範囲内での条件を満たすもの）は、或は偽作することも可能であったのではないか」⁹⁾と述べ、北宋の老子注『老子藏室纂微篇』をとりあげ、余敦康の例證の範囲内での『莊子注』と符合する序文を偽作することも可能であったろうこと、余敦康の論證の範囲内では、莊子序を確實に郭象の手定になると断定することはできない¹⁰⁾ことを例證している。そして、「郭象の莊子序の眞偽に関する疑問は、今日のところ、他の資料乃至は方法によっては、これ以上論證を進めることが一應不可能であるならば、殘る道は余敦康によってとられた莊子序の内面からの資料批判を、より一層徹底させる以外にないのだろう」¹¹⁾と結び、「あらためて莊子序と『莊子注』とを比較検討した結果、莊子序に用いられたそのほとんどすべての用語を『莊子注』の中に検索できることになり、ここにいたって、この兩者をなお別人の手になるものと反證することは、恐らく不可能であろう」¹²⁾と結論づけている。この点については、以下「三. 『莊子』「郭象莊子序」と郭象「莊子注」の關係について」の中で改めて檢證していくことにする。

古勝隆一は、後漢から東晉までの注釋書の序文を總體として取り上げ、「後漢から東晉にかけて成立した注釋書に附せられた序文群は、共通する學術史的基盤に依接して執筆されたものである」¹³⁾とし、この時期の序文に共通する要素として「A 原著が著された経緯、B 原著者の傳記、C 原著の書名に関する説明、D 傳承や注釋の歴史への言及、E 自身による文獻整理や辨偽の記録、F 注釋の動機についての説明、G 讀者に向けてのメッセージの要素がそれぞれ確認できる」¹⁴⁾としている。

そして、宋版以降の『莊子』刻本の巻首に見える「南華眞經序」について、「『莊子』の思想をパラフレーズしてまとめたものであるが、歴史的な記述がまったく含まれない。ここには〈莊子〉以外、學術史上の固有名詞—先行する注釋家の名前、書物の篇名など—は見えず、また本文の執筆者が『莊子』と學術的に關與した事跡が記されない。この序文は、内容から判斷する限り同時期の他の注釋書の序文と類似しない」¹⁵⁾とし、「京都高山寺には鎌倉時代抄寫の『莊子』郭注殘本が藏され、同書の終巻に当たる天下篇が遺る。この巻子の末尾には通行本に見えない一文があり、これが従来、〈莊子後序〉〈莊子後記〉などと稱されることが多かった。この一文に對して、上記の七要素の有無を調べると、そのうちのB・D・E・Fの四要素が存している事が分かる。この文は、形式的に見て同時期の注釋書の序文と類似しており、形式面から考えても眞の「郭象莊子序」ではないかと思われる」¹⁶⁾とし、先に挙げた青木五郎とは正反對の結論に至っている。他の同時期の序文とその性質を比較することだけによって結論を出すということは些か性急に過ぎるが、「郭象莊子序」だけが同時代の注釋書の序文と類似しないという指摘には注目すべきである。

二. 『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」

先に挙げたように、「内聖外王」の四字句が現れているのは、『莊子』本文の中でも天下篇の一箇所だけである。そして、郭象注まで廣げてみても書籍全體で「内聖外王」は全く見られない。そして、本文以外では唯一郭象序の中で用いられている。

あくまでも試論ではあるが、いくつかの原本『莊子』から、ほぼ現行本『莊子』に近い形に編纂される前の段階では、様々な系統の『莊子』があり、西晋の前後までにそれぞれに注釋が付けられていた。そして後に「惠施」が「天下篇」の末尾に加えられ、篇末に評語を付け加えることによって整えられたのではないだろうか。¹⁷⁾

なぜなら、「天下篇」の他の諸子では道術・方術に分け、その上で批判する手法を取っているのに對し、惠施については、一切そのような記述は見られないからである。そして末尾の評語は比較的長いものであり、「物」の分析と莊子の「道」の分析を對比させているのは、「天下篇」の主張する「内聖外王」の道から考えて違和感が残るからである。

なお、譚戒甫は「現存莊子天下篇的研究」の中で、王夫子の『莊子解』を引用し、「天下篇」に頭となる總論があるのに尾となる結論がないことに奇怪さを覚える。結論を埋めるために長文ではない「惠施」を持ってきたものの、いびつさは免れない。或いは後世の注釋者がもともと存在した七節目の文に不満を持っていたので、單行の「惠施」と取り替えてしまったのかもしれない。「惠施」との間に隔てが有るように感じるのは、無理矢理くっつけたからである、という趣旨のことを述べている。¹⁸⁾

『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」との関係については、兩者を一句一句精査する必要があるため、當論考ではこれ以上論及しないが、後日改めて私見を公けにし、大方の叱正を請いたいと考える次第である。

三. 『莊子』「郭象莊子序」と郭象「莊子注」の関係について

次に「郭象莊子序」と現行本の郭象「莊子注」との関係について見ていくことにするが、先ずは煩を厭わず「郭象莊子序」の原文を擧げることとする。¹⁹⁾ 前掲の青木五郎に「『莊子』郭象序の眞偽問題について」があり、「郭象注」との關わりについて分析を加えていることから、その正否も含め検討していきたい。²⁰⁾

なお、下線が付されている①から⑮に互る指摘箇所は、後で擧げている青木五郎の指摘する「郭象注」と關連のある箇所である。また、青木五郎には郭象序の眞偽問題について、前掲書と同年に發表された「郭象〈莊子序〉私箋」があり、²¹⁾ 郭象注と關係する箇所を抜き出して補っていったのが傍線部AからEの箇所である。

莊子序 河南郭象子玄撰

夫莊子者、可謂知本矣、故未始藏其狂言、①言雖無會而獨應者也。夫應而非會、則雖當無用。言非物事、則雖高不行。與夫②寂然不動、不得已而後起者、固有間矣、斯可謂知無心者也。夫心無爲、則③隨感而應、應隨其時、言唯謹爾。故與化爲體、流萬代而冥物、豈曾設對獨邁而游談乎方外哉。此其所以不經而爲百家之冠也。

然莊生雖未體之、言則至矣。通天地之統、序萬物之性、達死生之變、而明A内聖外王之道、上知造物無物、下知有物之B自造也。其言宏綽、其旨玄妙。④至至之道、融微旨雅。⑤泰然遣⑥放、C放而不敖。

故曰不知義之所適、猖狂妄行而蹈其大方。含哺而熙乎澹泊、鼓腹而游乎混芒。至仁極乎無親、孝慈終於兼忘、禮樂復乎己(己)能、忠信發乎天光。用其光則其朴自成、是以⑦神器獨化於玄冥之境而源流深長也。

故其D長波之所蕩、⑧高風之所扇、暢乎物宜、適乎民願。弘其鄙、解其懸、灑落之功未加、

而⑨矜夸所以散。故觀其書，超然自以爲已當，經崑崙，涉太虛，而游⑩惚恍之庭矣。雖復⑪貪婪之人，⑫進躁之士，暫而攬其餘芳，味其溢流，彷彿其音影，猶足⑬曠然有⑭忘形自得之懷，況探其遠情而E玩永年者乎。遂⑮綿邈清遐，去離塵埃而返冥極者也。

夫れ莊子は、本を知ると謂ふ可し。故に未だ始めより其の狂言を藏さず。言は會すること無しと雖も、獨り應ずる者なり。夫れ應じて會するに非ざれば、則ち當ると雖も用ふる無し。言ふこと物事に非ざれば、則ち高きと雖も行はれず。夫の寂然として動かず、已むことを得ずして後起つ者と、固より間有り。斯れ無心を知る者と謂う可きなり。夫れ心無爲なれば、則ち感に隨ひて應ず。應じて其の時に隨ひ、言ふこと唯だ謹むのみ。故に化と體を爲し、萬代に流れて物に冥す。豈に會て對を設けて獨り違ひ、而して方外に游談せんや。此れ其の經ずして百家の冠爲る所以なり。

然れども莊生未だ之を體せずと雖も、言は則ち至れり。天地の統に通じ、萬物の性を序し、死生の變に達し、而して内聖外王の道を明かにす。上は造物の無物なるを知り、下は有物の自ら造れるを知るなり。其の言は宏綽、其の旨は玄妙なり。至至の道、融微にして旨雅なり。泰然として遣放たれ、放たれて敖らず。

故に曰く「義の適く所を知らず、猖狂妄行して其の大方を蹈み、哺を含みて澹泊に熙しみ、鼓腹して混芒に遊ぶ。至仁無親に極まり、孝慈兼忘に終り、禮樂已(己)が能に復し、忠信天光に發す」と。其の光を用ふれば則ち其の朴自ら成る。是を以て神器獨り 玄冥の境に化して源流深長なり。故に其の長波の蕩く所、高風の扇ぐ所、物の宜きを暢べ、民の願ひに適ひ、其の鄙を弘め、其の懸を解く。灑落の功未だ加はらずして、矜夸散ずる所以なり。故に其の書を觀れば、超然として自ら以爲へらく已に當に、崑崙を經、太虛に涉り、而して惚恍の庭に遊ぶべしと。復た貪婪の人、進躁の士と雖も、暫くも其餘芳を攬り、其の溢流を味はひ、其の音影に彷彿とすれば、猶ほ曠然として形を自得に忘るの懷ひ有るに足る。況んや其の遠情を探りて永年に遊ぶ者をや。遂に綿邈清遐、塵埃を去離して冥極に返る者なり。

「郭象莊子序」について青木五郎は「余敦康によって試みられた莊子序と莊子注との間に何らの矛盾・抵牾もないという論証は、莊子序に盛られた中心思想とそれを表わすための術語（その多くは郭象特有のものといつてよいが）の範囲に限られていた。しかるにいま、あらためて莊子序にみられる用語を、必ずしも中心思想を表わすものではないものをも含めて、逐一、『莊子注』の中に検索してみると、なお次のように多くの同一乃至は類似の表現を見出すことができるのである」²²⁾とし、テクニカルタームを含む語句十五箇所に加分析を加えている。

次に青木五郎の分析箇所を全て列記するが、原文の並び順に表記するため、論文の表記を一部變えている箇所がある。また、郭象独自のテクニカルターム、或いは郭象と同時期に作られたと思われる箇所には、二重の下線を付してある（傍線部AからEの箇所については、青木五郎の指摘する箇所を全て挙げると、膨大な量になってしまうため、「郭象〈莊子序〉私箋」の中から「莊子注」に關する箇所と本文の論及に必要な箇所だけをピックアップした）。

なお、〈 〉の中の語は「莊子序」中の語句であり、「 」内の語は「莊子注」や他の出典による該當箇所である。

- ① 〈言雖無會〉「古之言者，必於會同」。〈徐無鬼注〉
- ② 〈寂然不動〉「豈得寂然不動，應感無窮，以輔萬物之自然也」。〈則陽注〉
- ③ 〈隨感而應〉「豈得寂然不動，應感無窮，以輔萬物之自然也」。〈則陽注〉・「是以無心玄應，

唯感之從」。(逍遙遊注)

④ 〈至至〉「豈知至至者不虧哉」。(逍遙遊注)

⑤ 〈泰然〉「此二者泰然而自得」。(庚桑楚注) 他多出。

⑥ 〈放〉「皆放之自得之場，則不治而自治也」。(應帝王注) 他多出。

⑦ 〈神器〉「所以逆其天機，而傷其神器也」。(秋水注)・「巧者有爲，以傷神器之自成」。(天下注)

⑧ 〈高風〉「其志尙清遐，高風邈世，與夫貪利沒命者，故有天地之降也」(讓王注)

⑨ 〈矜夸〉「將奔馳於勝負之竟，而助天民之矜夸」。(秋水注)・「去其心矜夸故也」。(寓言注)

⑩ 〈惚怳〉「豈求無爲於惚怳之外哉」。(庚桑楚注)

⑪ 〈貪婪之人〉「雖貪冒之人，乘天衢入紫庭，猶時慨然中路而歎，況其凡乎」。(讓王注)

⑫ 〈進躁〉「進躁無崖爲銳」。(天下注)

⑬ 〈曠然〉「然後能曠然無懷，而遊彼無窮也」。(知北遊注) 他多出。

⑭ 〈忘形自得〉「唯儼然無矜，遺形自得，道乃盡也」。(外物注)

⑮ 〈綿邈清遐〉「其志尙清遐，高風邈世，與夫貪利沒命者，故有天地之降也」(讓王注)

A 〈內聖外王之道〉「是故內聖外王之道，闇而不明，鬱而不發，天下之人各爲其所欲焉以自爲方。悲夫，百家往而不反，必不合矣」。(「天下」)

B 〈上知造物無物，下知有物之自造也〉「故造化者無主，而物各自造。物各自造而無所待焉，此天地之正也」。(齊物論注)・「夫莊老之所以屢稱無者，何故。明生物者無物，而物自生耳」。(在宥注)・「夫無不能生物，而云物得以生，乃所以明物生之自得」。(天地注)・「明物物者無物，而物自物耳。云云，則爲之者誰乎哉。皆忽然而自爾也」。(知北遊注)・他多出。

C 〈放而不敖〉「獨與天地精神往來，而不敖倪於萬物」(「天下」)

D 〈長波之所蕩〉「其波蕩傷性，遂至於此」(外物注)

E 〈玩永年者〉「若使憂能傷人，此子不得永年矣」(孔融「論攏摯章書」)・「鈞調中道，可以永年」(何晏「景福殿賦」)

青木五郎は、莊子郭象序に現れている語句について、郭象注との係わりについて比較検討しているが、改めてその出典をおさえていくと、「源流深長也」までの前半截においては、二重の下線を付した箇所である「言雖無會」一対象は「會」の一字のみである、「至至」、「自造」の外は、莊子注以外の出典や莊子本文を同時に踏まえた出典である。²³⁾

そして「言雖無會」について見ていくと、「會」については「達生」第十九に

不内變，不外從，事會之適也。始乎適而未嘗不適者，忘適之適也。²⁴⁾

(内に變らず，外に従はざるは，事會の適也。適に始まりて未だ嘗て適せずんばあらざる者は，忘適の適也)。

とあるように、類似の表現が見られる。

また、「至至」についても「田子方」第二十一と「秋水」第十七にそれぞれ

老聃曰，夫得是，至美至樂也，得至美而遊乎至樂。謂之至人。²⁵⁾

(老聃曰く，夫れ是を得るは，至美至樂也，至美を得て至樂に遊ぶ。之を至人と謂ふ)。

以其至小求窮其至大之域。是故迷亂而不能自得也。²⁶⁾

(其の至小を以て其の至大の域を窮めんことを求む。是の故に迷亂して自ら得る能はざる也)。

とあり、必ずしも郭象独自の思想を表白しているとは言えず、中には傍線部A・Cのように「天下篇」だけにその用例が認められる箇所も存在する。換言すれば、前半截で郭象独自の思想であると言える語句は「自造」のみである。

それに対して、後半截では郭象注からの出典が多く見られ、「故に曰く、義の適く所を知らず」から始まる全體の半分餘りを占める文章は、用いられているテクニカルタームや語句を見る限り、莊子「天下篇」との関連性は極めて薄いと思われる。なお、莊子郭象序後半の文中では、郭象が好んで使う用語である「獨化」・「自得」・「自成」といった郭象独自の思想も多く使用されている。

青木五郎は「郭象〈莊子序〉私箋」に於いても、莊子郭象序に現れている語句について、一語句一語句細かく出典を挙げ、郭象注との係わりについて比較検討しているが、「莊子本文と郭象注の雙方に出典の見られる例」・「先行する先秦期の語句と郭象注の雙方に出典の見られる例」・「莊子本文にしか出典の見られない例」・「先行する先秦期の語句の引用」といった引用箇所を除くと、郭象注独自のテクニカルタームや郭象と同時期に作られた語を含んだ箇所は、やはり後半截に集中して現れている。

そして、二重の下線部を付した箇所である「内聖外王之道」について、青木五郎は「郭象が、『莊子』の思想を〈内聖外王の道〉を明らかにしたものであるととらえていることは、老莊思想に經世的意義を積極的に見出そうとした表われで、注目に價するものである」と述べている²⁷⁾が、君臣がそれぞれ持って生まれた「性分」・「適性」を守るべきだと説くのが郭象であり、それは言わば「知足安分（足を知り分に安んず）」といった郭象独自の思想であり、「内聖外王」という經世的語句と相反する考えである。

「内聖外王」については、「天下篇」の莊子本文と郭象の「莊子序」を併せても二箇所の用例しかないのに対して、「獨化」は郭象注だけで十二箇所、「自得」に至っては郭象注だけで百十五箇所の多さである。²⁸⁾ 傍證とはいえ注視するべきである。やはり莊子郭象序の前半三分の二を占める部分は、莊子本文からの流用乃至關聯する部分であるが、「故に其の長波の蕩する所」以下の文は、前半部分に対する後世の注であると考えるのが穩當ではないだろうか。

最後に、莊子序の大意を挙げ、内容を見ていくことにする。

（莊子は言葉によって道を表現しようとしたことでは、充分に表現しきれてはいないが）道に通達している。だから始めから狂言を藏していたわけではない。莊子の言葉は感應するが、言葉は物の概念と言葉とが合致しなければ崇高であっても行われぬ。

道を體得した莊子はひっそりと靜止して動かず、必要に迫られて立つ者であり、無作為自然の無心の境地で、萬物に感應し、時の變化に随ってただ自分自身を慎むだけである。

だからあらゆる變化と一體になり、萬代に互って萬物と冥合する時、相對的な差異を設けて方外に談遊することだけを説いていたわけではない。これは莊子が諸子百家に冠たる所以である。

莊子は言葉によって道を表現しようとしたことでは、充分に表現しきれてはいないが、その言葉は至極である。莊子の言葉は天地萬物・あらゆる變化に通曉し、内聖外王の道を明らかにした。缺ける所のない道は泰然として天性の自己を解放しても傲り高ぶることはない。

以上の文章によって、莊子本文を多用し、言葉によって道を表現しようとするものの限界と莊子が諸子百家に冠たる所以が「内聖外王」という經世的語句に由来していることが理解できる。

また、以下の「故に曰く、義の適く所を知らず」から始まる文は、郭象の注乃至後人の作為する所と目される部分であり、莊子「知足安文」の考えによって述べた箇所であって明らかに前半とは趣を異にしている。

そこで、「あるがままに自己にふさわしい生き方をする」、「古代社會の理想通り、口に哺を含んで靜かに清らかに楽しみ」、「腹をたたいて混沌の中に遊ぶ」。「至仁は親愛の情を捨てた所に極まり」、「孝慈は自他共に忘れたところに移り」、「禮樂は自分の持ち前に具わり」、「忠信はその人の自然の輝きから發せられる」と莊子はいつている。その輝きを使えば、その人の本來持っている性質は自然と醸成されるのである。

だから莊子の考え・教化が及び至っているところについて、物の本來あるべき所を述べ、民の意をくみ、素樸を廣め、物事に執着せず、拂い落とせない物は加えず、調和を亂す物を外すのである。よってしばらく莊子の一部でも味わえば心身ともに自在な境地に達する。ましてや莊子の遙かな思いや永遠の生命を重視する者ならば尙更である。かくして莊子とは俗世から遠く離れ、俗塵と袂を分かち、本性に備わった分限に従って物と一體になる者なのである。

以上、「郭象莊子序」の内容から、全體の半分弱を占める前半の箇所は郭象の思想ではなく、『莊子』本文や先行する文献に拠っている（注23を参照）ことが理解されるが、「故に曰く、義の適く所を知らず」から始まる「郭象の注乃至後人の作爲する所」と目される部分は、何故この注の末尾に置かれているのか、という疑問が遺される。

目下の所、推測の域を出ないが、景德二年（1005年）の郭象注『莊子』校定・刻版に際して、「事に従った社鑄等が、序は郭象の文ではないとして删除した」後、「眞宗の命により李宗諤・楊億・陳彭年等によって別に讎校が加えられ、篇首に置かれた」²⁹⁾と徐輯本『宋會要稿』にあることから、郭象に似せて讎校が行われていったことに拠るのかも知れず、或いは單純ではあるが、前半部分についての郭象の注が「郭象莊子序」の末尾に付いているだけなのかも知れない。

以上の内容から「郭象莊子序」の眞偽について、作品全體としては郭象の作ということは出来ないものの、一部郭象の注も含まれている可能性があるといえるのである。なお、この問題については、「郭象莊子序」と「天下篇」との関係が明らかになれば、いっそうはっきりすることと思われる。

まとめ

「郭象莊子序」の眞偽を巡っては、王利器、余敦康らを皮切りに、今日に至るまでその眞偽問題は今日に至るまでその問題を巡る議論は陸續している。馮友蘭は、莊子序の「内聖外王」の王が強調されているのは、「莊子注」にはそぐわない。萬物の性分を強調するのが「莊子注」だとし、「莊子注」の序文ではなく、『莊子』に對する序文であるとしているが、それはある意味「莊子注」前半の部分に限って言えば正鵠を射ている。

また、「郭象莊子序」後半部分の文中では、郭象が好んで使う用語である「獨化」・「自得」・「自成」等といった郭象独自の思想も多く使用され、前半截と趣を異にしている。郭象独自の思想が多く見られる「郭象莊子序」後半の「故に曰く、義の適く所を知らず」以下の文は、前半部分の内聖外王に對する後世の注であると考えるのが穩當ではないだろうか。

あくまでも試論ではあるが、いくつかの原本『莊子』から、ほぼ現行本『莊子』に近い形に編纂される前の段階では、様々な系統の『莊子』があり、西晉の前後までにそれぞれに注釋が付けられていた。そして「惠施（篇）」が「天下篇」の結語として加えられ、整えられたのではないだろうか。なぜなら、「天下篇」中に現れている惠施以外の他の諸子は、道術・方術に分け、その上

で批判する手法を取っているのに、恵施については、一切そのような記述は見られないからである。そして末尾の評語は比較的長いものであり、「物」の分析と莊子の「道」の分析を對比させているのは、「天下篇」の主張する「内聖外王」の道から考えて違和感が残るからである。やはり、「天下篇」の後半部分には、結語となるべき文章があるべきである。結論があつてこそ、「天下篇」の諸子の中で最も解説が短く、中途半端な「未之盡者」で終わる莊子評の文を落ち着かせることが出来、「物の分析」に對する一定の結論も得られるからである。

思うに唐代の頃のテキストには、まだ本來の「郭象序（高山寺本所收の跋文）」が残されていたのではなかろうか。その後、何者かが郭象に假託して「天下篇」の一部を取り出し、「莊子序」として巻頭に置いた。そして、宋版『莊子』が版本として廣く流通するに隨つて思想史的意味合いの強い郭象序は廣く認知されるようになっていき、反對にテキストの編纂に係わる内容を中心としている本來の「郭象序」は跋に追い遣られ、「天下篇」全體が跋文的な性格を兼ね備えていることから不要と見なされて刪去された。その結果、宋版以降のどの版本にも見られなくなってしまったのではないだろうか。

なお、『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」との関係については、當論考の“二、『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」”でも述べたように、試論の域を出ていない爲、機會を見つけ、論證していくことを今後の課題としたい。

注

- 1) 武内義雄『老子と莊子』（岩波書店、1930）、PP. 128-130
- 2) 郭象序の眞偽問題について、青木五郎には『『莊子』郭象序の眞偽問題について』（『京都教育大學國文學會誌』、1979）、「郭象〈莊子序〉私箋」（『京都教育大學紀要』A、人文・社會五五、1979）の專論がある。なお、青木五郎は當初『老子藏室纂微篇』に引かれている注を引用し、郭象注を十分に咀嚼した者であれば、序文を偽作することは可能だとするが、序文中に引かれた郭象注によって、最終的に「郭象莊子序」は郭象のものだと判断している。
また、古勝隆一にも「郭象による『莊子』刪定」（『東方學』第九一輯、1996）、「後漢魏晉注釋書の序文」（『東方學報』第七三冊、2001）の專論がある。
- 3) 例えば、王利器『『莊子』郭象序の眞偽問題』（『哲學研究』第九期、1978）、余敦康「關於《莊子》郭象序の眞偽問題」（『哲學研究』第一期、1979）、黃聖平「所謂《莊子》郭象《序》作者辨正」（『中國哲學史』、2003）、李耀南「難“《莊子序》非郭象所作說”：兼與王曉毅和黃聖平兩位先生商兌」（『中國哲學史』、2005）、韓國良「也談《莊子序》的眞偽問題：兼論郭象“獨化論”在當時缺乏回應的原因」（『咸陽師範學院學報』、2007）、姜龍翔「郭象〈莊子序〉眞偽問題續探」（『國文學報』第四八期、2010）、馬鴻雁「郭象《莊子注》文獻學研究總述」（『成都大學學報（社會科學版）』、2012）等を擧げることが出来る。
- 4) 水野厚志「『莊子』天下篇の〈内聖外王〉について」（『東京國際大學論叢』言語コミュニケーション學部編、第十一號、2015）を参照。
- 5) 王利器「再論『莊子』郭象序の眞偽問題」（『曉傳書齋文史論集』、1978）PP. 209-216
- 6) 馮友蘭『中國哲學史新編』第四卷（人民出版社、1989）、P. 196
- 7) 前掲「郭象〈莊子序〉の眞偽問題續探」、PP. 53-56
- 8) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 31
- 9) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 32
- 10) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 33
- 11) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 33
- 12) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」、P. 34
- 13) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」、P. 12
- 14) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」、P. 7
- 15) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」、PP. 12-13

- 16) 前掲「後漢魏晉注釋書の序文」, P. 13
- 17) 「様々な系統の『莊子』があり…」の一文について補足すると、『漢書』『藝文志』に『老子』は三種、『莊子』は一種のみが挙げられているのに対し、南北朝の宋の劉義慶が編纂した『世說新語』には、兩者併せて百餘りの書があったとあることから當時、様々な系統の莊子が残っていたことを窺い知ることができる。また、「恵施」が「天下篇」の末尾に加えられ、篇末に評語を付け加えることによって整えられた可能性と「天下篇」の「内聖外王」の関係については、前掲「『莊子』天下篇の〈内聖外王〉について」を参照。なお、後述のように『莊子』「天下篇」と「郭象莊子序」との関係については、近日中に別稿にて論證していく豫定である。
- 18) 譚戒甫「現存莊子天下篇的研究」の當該箇所は次の通りである。
(4) “天下篇”共六章，第一章是總論，第二至第六章是分論，章法極其謹嚴，呼應極其靈活，古籍中實不易見。但有一個缺點，僅有首而無尾，即沒有總結，很覺奇怪…中略…所以我認為當時的“略要”，可能還有第七章來敘述莊惠各自的思想 and 辯論，并加以批判作為總結的…中略…我又認為這第七章，原文或不很長，比起第一章來，不免相形見拙…中略…或者後世注家不滿于原第七章的較遜，竟擅引單行的“惠施篇”來代替了。也許原第七章和“惠施篇”間有相似之處，故敢取彼以易此，這可能也是一個原因。
譚戒甫「現存莊子天下篇的研究」（『哲學研究叢刊第5輯』『中國哲學史論文初集』，1959），P. 72。なお、「天下篇」篇中の恵施は、前掲「『莊子』天下篇の〈内聖外王〉について」を参照。
- 19) 郭慶藩撰・王孝魚點校「新編諸子集成」『莊子集釋』（中華書局，1985，北京五次印刷），P. 3によるが、一部標點を變更している。
- 20) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」, PP. 33-34
- 21) 「郭象〈莊子序〉私箋」（『京都教育大學紀要』A, 人文・社會五五, 1979）
- 22) 前掲「『莊子』郭象序の眞偽問題について」, P. 33
- 23) 青木五郎は、「余敦康が例證した四の諸例と合わせると、〈未始臧其狂言〉〈不得已而後起〉〈内聖外王之道〉〈不知義之所適～忠信發乎天光〉など莊子本文をふまえた表現をのぞいて、〈莊子序〉に用いられたそのほとんどすべての用語を『莊子注』の中に検索できることになり、ここにいたって、この兩者をなお別人の手になるものと反證することは恐らく不可能であろう」という。前掲「郭象〈莊子序〉私箋」, P. 189。しかしながら、以下に列挙するように、莊子序の前半截はそのほとんどすべてが莊子本文と『易』や『孟子』等を出典としている（青木氏が自身の專論「郭象〈莊子序〉私箋」の中で指摘している出典がその證左となっている）ことから、後半截と分けて考えるべきである。出典を挙げると次の通りである（〈 〉中の語は「莊子序」中の語句であり、「 」内の語は『莊子』本文や他の先行する出典による該當箇所である）。

〈可謂知本矣云云〉「狂屈聞之，以黃帝爲知言」。（知北遊）

〈未始臧其狂言〉「夫體道者，天下之君子所繫焉。今於道，秋豪之端萬分未得處一焉，而猶知臧其狂言而死。又況夫體道者乎」。（知北遊）・「肩吾問於連叔曰，吾聞言於接輿，大而無當，往而不反云云。吾以是狂而不信也」。（逍遙遊）

〈寂然不動〉「易，無思也，無爲也，寂然不動，感而遂通天下故」。（易，繫辭上）

〈不得已而後起〉「故曰，聖人之生也天行，其死也物化云云。感而後應，迫而後動，不得已而後起。去知與故，循天之理」（刻意）・「孟子曰，予豈好辯哉。予不得已也」。（孟子・滕文公）・「一宅而寓於不得已，則幾矣」。（人間世）・「且乘物以遊心，託不得已以養中，至矣」。（人間世）・「崔乎，其不得已乎」。（大宗師）

〈知無心者〉「形若槁骸，心若死灰。眞其實知，不以故自持，媒媒晦晦，無心而不可與謀。彼何人哉」。（知北遊）

〈夫心無爲，則隨感而應〉「故曰，聖人之生也天行，其死也物化云云。感而後應，迫而後動，不得已而後起。去知與故，循天之理」（刻意）

〈應隨其時〉「故禮義法度者，應時而變者也」。（天運）

〈言唯謹爾〉「孔子於鄉黨，恂恂如也，似不能言者。其在宗廟朝廷，便便言唯謹爾」。（論語・鄉黨）

〈故與化爲體〉「古之眞人，不知說生，不知惡死」。（大宗師）・「死生無變於己」。（齊物論）

〈豈曾設對獨遭，而游談乎方外哉〉「孔子曰，彼遊方之外者也。而丘遊方之內者也」。（大宗師）

〈然莊生雖未體之〉「夫體道者，天下君子所繫焉」（知北遊）
 〈達死生之變〉「死生無變於己，而況利害之端乎」（齊物論）・「死生爲晝夜」。（至樂）
 〈泰然〉「宇泰定者，發乎天光」。（庚桑楚）
 〈放〉「一而不黨，命曰天放」。（馬蹄）
 〈放而不敖〉「獨與天地精神往來，而不敖倪於萬物」。（天下）
 〈不知義之所適，猖狂妄行，而蹈其大方〉「南越有邑馬。名爲建德之國。其民愚而朴，少私而寡欲，知作而不知藏，與而不求其報，不知義之所適，不知禮之所將，猖狂妄行，乃蹈乎大方」。（山木）・「大均緣之，大方體之」。（徐無鬼）
 〈含哺而熙乎澹漠，鼓腹而遊乎混芒〉「夫赫胥氏之時，民居不知所爲，行不知所之。含哺而熙，鼓腹而遊，民能以此矣」。（馬蹄）・「古之人在混芒之中，與一世而得澹漠焉」。（繕性）・「澹而靜乎，漠而清乎，調而閒乎」。（知北遊）
 〈至人極乎無親〉「請問至仁，莊子曰，至仁無親」。（天運）・「故曰，至禮有不仁人，至義不物，至知不謀，至仁無親，至信辟金」。（庚桑楚）
 〈孝慈終於兼忘〉「故曰，以敬孝易，以愛孝難。以愛孝易，而忘親難。忘親易，使親忘我難。使親忘我易，兼忘天下難。兼忘天下易，使天下兼忘我難」。（天運）
 〈禮樂復乎己能〉「禮樂偏行，則天下亂矣。彼正而蒙己德，德則不冒。冒則物必失其性也」。（繕性）・「性情不離，安用禮樂」。（馬蹄）
 〈忠信發乎天光〉「宇泰定者，發乎天光。發乎天光者，人見其人」。（庚桑楚）
 〈用其光，則其朴自成〉「見小曰明，守柔曰強。用其光，復歸其明，無遺身殃」。（老子・五十二）・「常德乃足，復歸於樸。樸散則爲器。聖人用之，則爲官長」。（老子・二十八）・「夫殘樸以爲器，工匠之罪也」。（馬蹄）
 〈神器獨化於玄冥之境〉「天下神器，不可爲也」。（老子・二十九）・「以天合天，器之所以疑神者，其是與」。（達生）・「於諠聞之玄冥，玄冥聞之參寥」。（大宗師）・「始於玄冥，反於大通」。（秋水）

- 24) 前掲『莊子集釋』, P. 662
 25) 前掲『莊子集釋』, P. 714
 26) 前掲『莊子集釋』, P. 568. 故に曰く義の適く所を知らず
 27) 前掲「郭象〈莊子序〉私箋」, P. 189
 28) 本文の検索には北原峰樹編『莊子郭象注索引』（北九州中國書店, 1990）及び劉殿爵・陳方正主編『香港中文大學中國文化研究所 先秦兩漢古籍逐次索引叢刊 子部第四三莊子逐字索引』（商務印書館, 2000）を利用した。
 29) 前掲 王利器『『莊子』郭象序の眞偽問題』, PP. 53-55, 「『莊子』郭象序の眞偽問題について」P. 28を参照。

参考文献

- 赤塚忠（一九七四年）『全釋漢文大系16 莊子上』集英社
 赤塚忠（一九八〇年）『全釋漢文大系17 莊子下』集英社
 池田知久（一九八三年）『莊子上』學習研究社
 池田知久（一九八六年）『莊子下』學習研究社
 王先謙（一九七四年）『莊子集解』臺灣・三民書局印行
 郭慶藩 撰（一九六一年）『新編諸子集成 莊子集釋』中國北京・中華書局
 周啓成 校注（一九九七年）『莊子虞齋口義校注』中國北京・中華書局
 服部宇之吉 校訂（一九一一年）『莊子翼』富山房
 福永光司（一九六六年）『中國古典選7 莊子 內篇』朝日新聞社
 福永光司（一九六六年）『中國古典選8 莊子 外篇』朝日新聞社
 福永光司（一九六七年）『中國古典選9 莊子外篇 雜篇』朝日新聞社
 方勇 撰（二〇一二年）『莊子纂要』中國北京・學苑出版社
 牧野謙次郎（一九一四年）『漢籍國字解全書 莊子上』早稻田大學出版部
 牧野謙次郎（一九一四年）『漢籍國字解全書 莊子下』早稻田大學出版部